

大学生活・就職活動が自己効力感に与える影響

The effect of the experiences of campus life and job-hunting endeavors on undergraduates' self-efficacy

高橋 桂子 石井 藍子
Takahashi Keiko Ishii Aiko

1 はじめに

大学進学率は年々上昇し、2006年3月には高等学校卒業者の52.3%が進学し、「教育の大衆化」に突入している。from school to work で形容されるように、大学は教育機関最後の場であると同時に、人間味溢れ、教養豊かで、自信に満ちた主体的・積極的な行動をとる社会人になるべく準備するための重要な期間として捉えることができる。「大学はレジャーランドである」、「大学の教育は役に立たない」とされ、大学機能の有用性が問われたこともあった。しかし矢野(2005)は、工学部卒業生を対象に行ったアンケート調査結果(矢野(2001))から、「大学時代の学習熱心度」から「現在の地位」に対して、直接的な影響は見られないものの、「現在の能力」に対してプラスの影響を通して、間接的に「現在の地位」を向上させる効果を検証し、大学の機能自体は有効であるが、社会の認識が無効であり、機能と認識の間にズレが生じているとする「隠蔽説」を提唱した。また高橋(2007a)では、「大学時代の学習熱心度」は「友との出会い」の規定要因となるが、その逆、「友との出会い」は「大学時代の学習熱心度」の規定要因とはならないことを明らかにした。これら研究により、大学時代の学習熱心度や友達との交流の在り方が、教育の場を離れた後の人生に大きな影響を与えることが推測される。しかしながらこれまでの研究の多くは、大学の2つの機能のうちの前者、つまり大学の教育効果に関するものが多く、人間味溢れ、教養豊かで自信に満ちた、主体的な行動をとることができる能力の源泉である、大学時代の人間関係の在り方に関する研究は少ない。

本研究では、必要な行動をうまくできるだろうという自分自身がつもつ自信・信念である「自己効力感」をキーワードに、大学生活や、大学と社会を結ぶ就職活動がどのような影響を与えているか検証する。

2 先行研究と仮説

(1) 先行研究

「自己効力感」とは、Bandura(1977)によって確立された概念であり、必要な行動をうまくできるだろうという自分自身がつもつ信念を表す。この自己効力感は、課題や場面に限定された自己効力感(task-specific self efficacy: 以下 SSE)と、より一般的に日常場面に影響する特性的自己効力感(generalized self efficacy: 以下 GSE)の2つの水準に分けることができる。SSEは、Taylor&Betz(1983)によって進路選択に対して適用され、進路を選択・決定する過程で必要な行動に対する遂行行動可能感を指す進路選択に対する自己効力感(career decision-making self efficacy)という概念を提唱した。進路選択に対する自己効力感を計測するために2人が作成した尺度は、浦上(1995)によって邦訳されている。

浦上(1996)はこの進路選択に対する自己効力感尺度を用いて多くの調査を行い、就職活動を通して成長していく過程を検証している。その結果、進路選択に対する自己効力感が高い者は積極的に就職活動を行い、その後の自己成長力の値も高いことが明らかとなった。自己成長力とは1994年、「自己教育力」という言葉

に焦点が当てられていた当時、知育のみに限らず、広い意味で自らが自分自身を伸ばしていこうとする新しい力として速水ら（1994）によって定義された用語である。この自己成長力という言葉のとおり、今後、反復学習や詰め込み方の学習のメリトクラシーではなく、問題解決や対人コミュニケーションといった、ハイパーメリトクラシー要素が重要視されると考えられる。このことから、大学において、授業内容や設備の充実といった面のみならず、学部・学年・学科を越えた交わりが重要と考える。しかしこの調査では、成長要因を就職活動だけに限定したものであり、大学生活全体を検討したものではない点、自己効力感自体の変化を測定していない点、調査対象が女子短期大学生という点が課題として残っている。

玄永（2006）によって、大学生活と進路選択に対する自己効力感についての研究もされている。この結果では学内の友人からは進路選択に対する自己効力感に対してプラスの影響は確認されなかったが、それは調査対象が1・2年生であることが原因と指摘されている。加えて、自己効力感の就職活動への影響は検証されていない。また、金城（2006）は、若者のコミュニケーション能力の育成には、当該能力に対する自己効力の向上を視野に入れた教育が必要であると示し、大学生のコミュニケーション能力と自己効力感の関係性を調査している。

そこで本研究は、自己効力感、就職活動、大学生活、その後の効果すべてについて同時に調査する。そのため調査対象者は就職活動終了直後の大学4年生とした。

(2) 仮説

浦上（1996）のモデルをもとに、以下の3つの仮説を設定する。

仮説1 大学生活の充実感は、就職活動に対し、プラスの影響を与える。

仮説2 大学生活を通し、一皮向けるような体験や、自分なりに充実した大学生活を送ることによって、より高い効力感を得ることができる。

仮説3 成長する要因の中でも、大学生活の人間関係に起因するものがもっとも大きい。

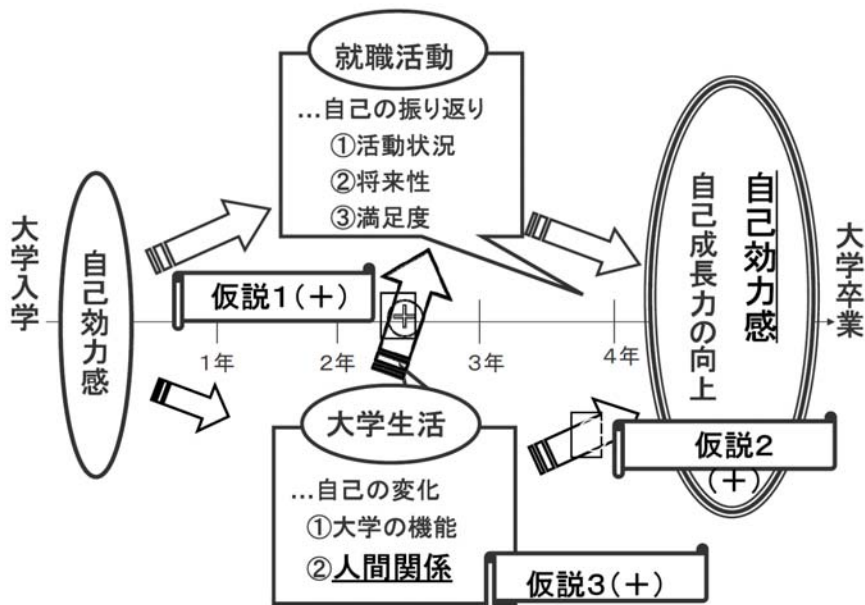


図 1 研究の枠組み

3 研究方法

(1) 調査概要

新潟大学4年生、就職活動経験者を対象に2007年8月下旬～9月にかけてアンケート調査を実施した。配

布枚数 250 枚、有効回収率 44% (n=110) である。回答者の属性は性別では男子 43 名・女子 67 名、部活動参加割合 (途中退部含む) は体育会系 49.1%・文化系 35.4%であり、部活に参加しなかった割合は 15.5%と少ない。

調査項目は以下のとおりである。

- 1) 特性的自己効力感尺度：成田ら (1995) の作成した特性的自己効力感尺度、23 項目を用い、大学入学当時 (pre.) と現在 (aft.) それぞれ「とてもあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」の 4 段階で求めた。
- 2) 就職活動についての調査：浦上 (1996b) で用いた、「自己と職業の理解・統合」を測定する 5 項目、「就職活動の計画・実行」を測定する 6 項目、「就職活動に対する振り返り」に関する 5 項目の計 16 項目を使用した。回答は「よく考えたり、行ったりした」から「全く考えたり、行ったりしなかった」の 4 段階で求めた。
- 3) 大学生活についての調査：大学生活を「人間関係」と「大学の機能」に分類されると仮定し、独自で 20 項目作成した。回答は「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の 4 段階で求めた。
- 4) 自己成長力の変化：浦上 (1996b) の研究では、速水らの作成した自己成長力を測定する尺度を用いているが、本調査ではベネッセの定義する自己成長力の 5 観点、①成長動機、②自己成長課題の設定力、③自己評価力、④生き方の構想力、⑤自己コントロール能力をもとに独自で 15 項目を作成し、「とてもあてはまる」から「全然あてはまらない」の 4 段階で回答を求めた。
- 5) 大学生活充実感：「大学の授業」、「部活・サークル活動」、「アルバイト・課外活動」、「人間関係」、それぞれについて 0~100 で自分なりにパーセントで表現させた。

(2) 分析に用いる指標の整理

a) 就職活動尺度

主因子法・Varimax 回転による因子分析を施し、十分な負荷量を持たなかった 1 因子は除外した。回転後の最終的な因子パターンを表 1 に示す。

表 1 就職活動尺度の因子分析 (Varimax 回転後の因子行列)

	I	II	III
1. 自分の才能を、最も生かせると思う職業分野を決めること	.70	.14	.19
6. 自分の理想の仕事について考えをめぐらすこと	.64	.10	.01
4. 自分の興味・能力に合うと思われる職業を探すこと	.61	.07	-.08
3. 仕事として自分に何ができるのか、くり返し考えること	.58	.17	.15
2. 自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと	.56	.06	.40
5. 自分を厳しく見つめ直すこと	.52	.41	-.07
11. 自分の職業選択に必要な情報を得るために、インターネットのサイトなどを利用すること	.44	-.02	.25
7. 本当に好きな職業に進むために、親と話し合いをすること	.36	.28	.22
8. 失敗や成功の原因を考えながら就職活動を続けること	.18	.87	.19
9. 就職活動がうまくいかないとき、その理由を考えること	.07	.74	.22
10. 採用する側に立って、自分を見直すこと	.20	.42	.33
12. 自分たちの年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと	.02	.12	.63
16. 就職時の面接の練習をすること	.00	.18	.46
13. 就職活動がうまくいかないからといって悩み、考え込んだりせず、積極的に活動を続けること	.20	.06	.46
14. できるだけ多くの採用先(会社や学校等)と連絡をとること	.10	.32	.41
因子寄与	2.71	2.05	1.45
寄与率	16.94	12.80	9.08
α	.79	.77	.59

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法

第 1 因子には「自己と職業の理解・統合」に関する 5 項目と、「就職活動の計画・実行」に関する 1 因子、「就職活動に対する振り返り」に関する 2 項目が高い負荷量を示している。3 項目を見てみると、自らを理

解しようとしているものであり、「自己と職業の理解・統合」の因子と命名する。第2因子には、「就職活動に対する振り返り」に関する因子が3項目であり、「就職活動に対する振り返り」の因子とする。第3因子も「就職活動の計画・実行」に関する因子が4項目であり、「就職活動の計画・実行」と命名する。

因子分析結果に基づき、Varimax 回転後の因子得点を推定することによって「理解統合」得点、「振り返り」得点、「計画実行」得点を算出した。それぞれの因子の α 係数は「自己と職業の理解・統合」因子、 $\alpha = .79$ 、「就職活動に対する振り返り」因子 $\alpha = .77$ 、「就職活動の計画・実行」因子 $\alpha = .59$ であった。

b) 大学生生活尺度

主因子法・Promax 回転による因子分析を施し、十分な負荷量を持たなかった2因子は除外した。回転後の最終的な因子パターンを表2に示す。累積寄与率は34.1%であった。

第1因子には、「何気ないことで笑える友達に出会えた」、「気軽に誘い合える友達ができただ」などが高い負荷量を示し、予想通り、「人間関係」因子と命名できる。 $\alpha = .84$ であった。第2因子には、「高校の頃から学びたかったことを大学の授業で学ぶことができた」、「学校の授業の成績には満足している」といった、大学の授業に関する項目が高い負荷量を示し、予想の「大学の機能」因子として、適していると考えられる。 $\alpha = .71$ であった。

この因子分析結果に基づき、Promax 回転後の因子得点を推定することによって、「人間関係」得点、「大学の機能」得点を算出した。

表2 大学生生活尺度の因子分析(Promax 回転後の因子パターン)

	I	II
8. 何気ないことで笑える友達に出会えた	.86	-.18
1. 気軽に誘い合える友達ができただ	.66	.02
5. それまで出会わなかったタイプの人間と友達になった	.66	-.14
4. アルバイトや課外活動を通して、学校では学べないことを学べた	.63	-.17
17. 夜通し、友達と語り合うことがあった	.63	.09
3. 生涯の親友といえる人間に出会った	.60	-.11
12. 様々なタイプの友達と積極的に会話をした	.49	.31
7. 学校以外に相談したり、遊びに行ったりする仲間や先輩ができただ	.48	.09
19. 好きな人ができただ	.45	.16
18. 大学生生活を通して、自分の相対的位置(ポジショニング)がわかった	.39	.09
9. サークル活動に熱中した	.38	.11
13. アルバイトで失敗しても、自分を見直し、途中でやめなかつた	.36	.12
2. 高校の頃から学びたかったことを大学の授業で学ぶことができた	-.07	.65
20. 学校の授業の成績には満足している	-.04	.63
15. 授業は休まず出席した	-.30	.52
11. 自分のやりたいこと、夢中になれるものが見つかった	.15	.47
16. 一緒にいることで自分を高められる、ライバルにあつた	.21	.44
14. 責任を持ってやりとげた仕事があつた	.27	.43
因子間相関	I	II
	I	-.50
	II	-
	α	.84 .71

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

c) 特性的自己効力感 (pre.)、特性的自己効力感 (aft.) と自己成長力尺度

「大学入学当時の自己効力感」、「現在の自己効力感」、「自己成長力」については因子分析の結果、一次元的であることが明らかとなったので、それぞれを1因子とし、下位尺度得点を算出した。以降自己効力感を (pre.)、(aft.) と区別する。それぞれの α 係数は、「自己効力感 (pre.)」=.83、「自己効力感 (aft.)」=.84、「自己成長力」=.83であった。

4 分析結果、考察

(1) 構成概念間の相関係数

大学生生活及び、就職活動がその後どのような影響を与えるか検証していく。表3に構成概念間の相関係数を示す。自己効力感 (aft.) に対し、就職活動尺度の「計画実行」、大学生生活尺度の2因子、「人間関係」と「大学の機能」が高い相関をもち、自己成長力に対しては、就職活動尺度、大学生生活尺度すべての因子について、高い相関が相関をもっている。なお、自己効力感 (pre.)、(aft.) の相関が高いが、これは質問の配置がよくなかったことが影響を与えていると思われる。

表3 構成概念間の相関係数

	2	3	4	5	6	7	8
1. 自効pre	.08	.14	.21 *	.24 *	.38 ***	.78 ***	.38 ***
2. 理解統合	-	.06	.08	.41 ***	.30 **	.18	.42 ***
3. 振り返り		-	.11	-.04	-.01	.17	.27 *
4. 計画実行			-	.29 **	.37 ***	.33 **	.25 *
5. 人間関係				-	.58 ***	.39 ***	.33 **
6. 大学機能					-	.51 ***	.36 ***
7. 自効aft						-	.48 ***
8. 自己成長							-

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

(2) 男女差の検定

自己成長力尺度は、女性より男性のほうが有意に高い得点を示した ($t(94) = 2.31, p < .01$)。他の尺度については、男女の得点差は有意ではなかった。自己成長力項目の具体的なt検定では、「新しいことにチャレンジして自分を高めようとする」という項目のみが男性の方が高い値がみられた。

表4 男女別の平均値とSD及びt検定

	男性		女性		t値
	平均	SD	平均	SD	
自効PRE	2.61	0.30	2.62	0.40	-0.16
理解統合	3.20	0.46	3.20	0.48	-0.02
振り返り	2.91	0.75	2.93	0.64	-0.18
計画実行	2.70	0.58	2.73	0.59	-0.27
人間関係	3.28	0.42	3.36	0.51	-0.86
大学機能	2.77	0.53	2.83	0.60	-0.59
自効AFT	2.73	0.35	2.69	0.40	0.57
自己成長	3.16	0.62	2.91	0.44	2.31 *

* $p < .05$

(3) 仮説の検証

仮説1

就職活動尺度を従属変数、大学生生活尺度を独立変数とし、重回帰分析を行った。

表5 就職活動尺度と大学生生活尺度の重回帰分析

	理解統合	計画実行	振り返り
	β	β	β
人間関係	.35 **	.10	-.05
大学機能	.09	.32 **	.02
R^2	.17	.15	.00

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

β : 標準偏回帰係数

「人間関係」因子から「理解・統合」、「大学の機能」因子から「計画・実行」への影響が検証された。大学生生活は就職活動に対し、プラスの影響を与えるとし、仮説1は支持された。

仮説 2

大学生活を通し、一皮向けるような体験の関連内容を見ると（図 2）、「クラブ・サークル活動」、「アルバイト・課外活動」の順に高い。特に「クラブ・サークル活動」の充実感は「自己効力感 (aft.)」とプラスの相関が見られる。よって、仮説 2 も支持された。

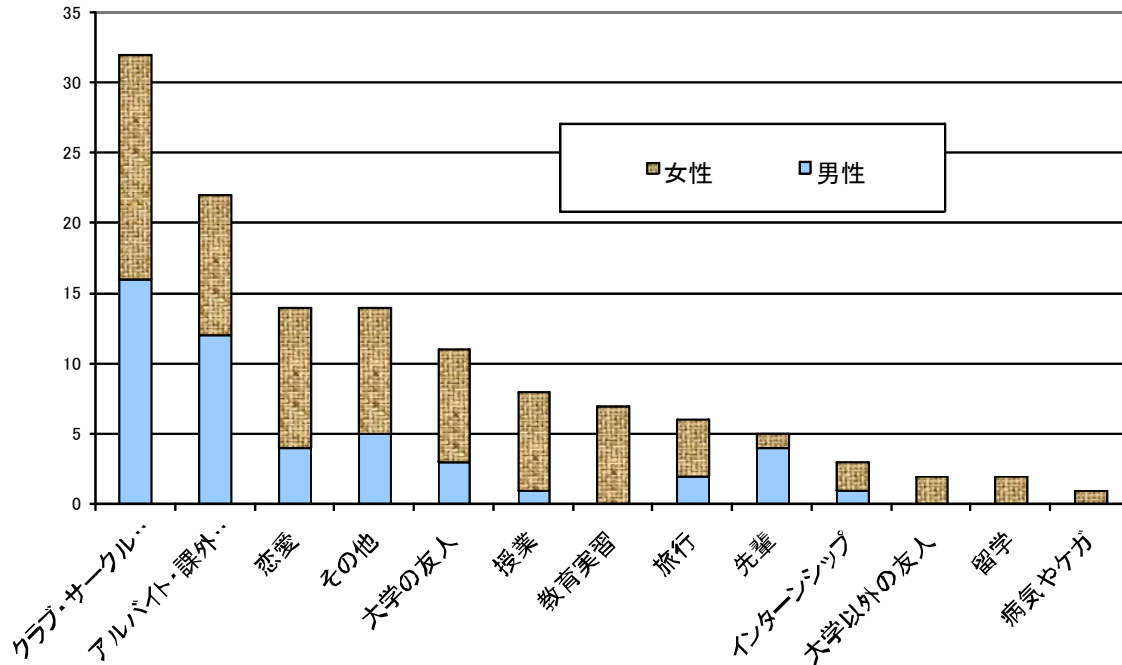


図 2 一皮向けた体験の関連内容

表 6 大学生生活の充実感と自己効力感 (pre.), (aft.), 自己成長力の相関

	自効pre.	自効aft.	自己成長
大学の授業	.19	.19	.07
部活・サークル活動	.25 *	.27 *	.03
アルバイト・課外活動	.08	.04	.07
人間関係	.22 *	.25 *	.12

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

仮説 3

「自己効力感 (aft.)」、「自己成長力」を従属変数、大学生生活尺度、就職活動尺度を独立変数とし、重回帰分析を行った。

表 7 自己効力感 (aft.), 自己成長力と人間関係因子に関する重回帰分析

	自効(aft.)	自己成長力	人間関係
	β	β	β
理解統合	-.06	.27 **	.26 **
振り返り	.15	.22 **	-.06
計画実行	.18	.16	.09
人間関係	.16	.08	
大学機能	.37 **	.16	.47 ***
R ²	.30 ***	.34 ***	.41 ***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

β : 標準偏回帰係数

大学生生活尺度の「人間関係」因子から、「自己効力感 (aft.)」、「自己成長力」ともに直接的なプラスの影響は見られていない。しかし、「人間関係」因子は、「理解・統合」、「大学の機能」に対し、有意にプラスの影響を与えており、2 因子はそれぞれ「理解・統合」因子は「自己成長力」へ、「大学の機能」因子は「自己効力感 (aft.)」への影響が明らかになっている。

「人間関係」は直接的には影響は与えないものの、間接的に影響を与える要因のひとつであるといえる。よって、仮説3も支持された。

(4) パス解析

以上の分析をふまえ、パス解析を行った。「内定先への進路志望度」も就職活動尺度同様、「自己成長力」に影響を与えている。浦上(1996)の研究では、「内定先の有無」は「自己成長力」に影響を与えないという結果が出ていたため、今回の調査では質問項目から割愛したが、本結果からは、内定先の有無も結果に有意な関連があったのではないかと予測される。

また「自己成長力」から、「自己効力感(aft.)」への影響も確認できた。このことは、就職活動で、これまでの人生を振り返るととともに、はじめて学生とは異次元の、社会に出て、働くということを目の当たりにし、これから自分もその中に入っていくのだ、と将来の姿をイメージすることによって、自己成長力、これからは自分を伸ばしていこうという力がつき、それが自分に対する自信にもつながる、と考えられる。

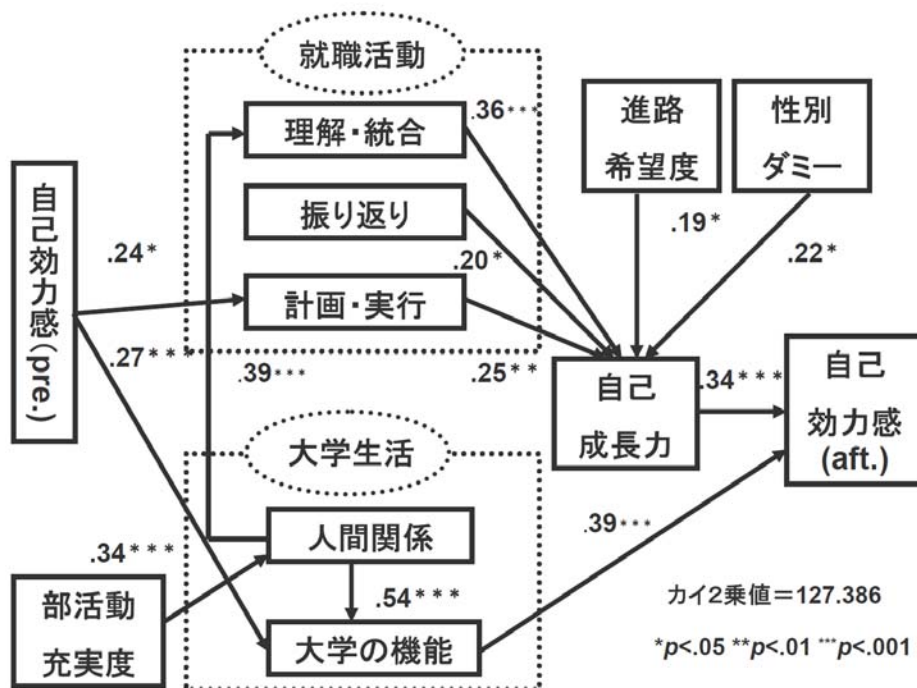


図3 パス解析の結果

5. まとめと提案

以上、大学生活においていかに多くの人間と交わることができるか、そして、一皮むけるような体験ができるか、ということが高い自己効力感を得るためにも重要であることが確認された。大学生活や就職活動を通して自己効力感を高めることが確認できた点は、大学が、社会に出る前の準備期間として有用であることの傍証である。出身や生活空間が異なる同世代が集まる大学生活には、それまでとは違った経験、何らかの失敗や挫折、自分を変えるような体験をする。そのような経験を克服できたという自信も、社会人となってもプラスとなって活かしていけるはずである。

一方で、大学も、部活動参加や友達との交流といった学生本人の自主的な取り組みに任せるだけでなく、戦略的な支援・取組を組み込むことが必要と考える。具体的には、3つのキーワードをとりあげる。

- ・学部・学科・学年を超えた繋がりをつくる
- ・チームとして何かを一緒に成し遂げる、という体験をさせる
- ・勉強でもスポーツでも、同世代の他人と本気で競い合う、という体験をさせる

本学では、総合大学の特性を活かし、平成19年度から文部科学省事業「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」である「ダブルホーム制による、いきいき学生支援～地域協働による、学生の自律を目指す、予防的環境の構築～」が実施されているが、その取り組みに加えて、本稿では2つの提案を行う。

- 1) 大学全体での体育祭などのスポーツ大会を実施する。
- 2) 入学後、1年間の完全寮生活をあげる。

本調査で明らかになったように、大学生生活の充実感は「部活動参加」が根底となっているものが大きい。部活動に参加して多様な経験をつむことは、社会人として当然備えるべき資質として求められているコミュニケーション能力や責任感、忍耐力などを研鑽することができる貴重な場である。日本企業の場合、個人で仕事に取り組むより、チームとして取り組むことの方が多い。その予行演習を行うことも重要であろう。さらに、勉強でもスポーツでも、同世代の他人と本気でぶつかり合うことによって、さまざまな能力を客観的に評価・判断することができ、自ずと集団やグループにおける自分のポジショニング・「立ち位置」を認識・理解するであろう。対人関係スキルが深まる瞬間でもある。

また、新入生は1年間の寮生活を励行するというのも、「規律の遵守、責任感の涵養、自律の精神の高揚」（自治医科大学）といった人間力の向上を刺激する仕組みとして意味があると考えられる。少子化により兄弟数が少なくなり、同世代と切磋琢磨する、競い合う、もしくは協力しあうという生活経験が少ない。集団生活を通して磨くことができるスキルもある。東京理科大学・長万部キャンパス（基礎工学部）では20年来の実績があるし、豊田工業大学も1年間全寮制を採用している。海外の大学に目をむければイギリスのオックスフォードやケンブリッジでは、学生だけではなく教師も寝食を共にし、同じ建物に住み、そこで共に学ぶというカレッジ（学寮）スタイルを取り入れている。様々な分野から興味を持った人たちが集まることで議論が生まれ、新しいものを創造する力となる。カレッジ間でスポーツ・文化活動について自発的な切磋琢磨を誘発する、といった点で、強みを持ったシステムといえる。もちろん、イギリスのスタイルを日本に直輸入するのではなく、寮生活に慣れていない新入生があたらしい環境にソフトランディングできるよう、アドバイザーとして適性ある上級生を配置するといった、よりきめ細やかな対策・制度設計も必要であろう。

これからの入学生の気質の変化に応じて、学生たちがもっている潜在的な能力や生活力をいかに刺激し、向上させ、自己効力感を高める仕組みを大学が提供することができるのか、検討していく必要がある。

参考文献

- 東清和・安達智子（2003）『大学生の職業意識の発達—最近の調査データの分析から—』学文社
- 浦上昌則（1995）「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」『名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）』42,115-126
- 浦上昌則（1996a）「女子短期大学生の職業選択過程についての研究—進路選択に対する自己効力、就職活動、自己概念の関連から—」『教育心理学研究』44, 195-203
- 浦上昌則（1996b）「就職活動を通しての自己成長—女子短期大学生の場合—」『教育心理学研究』44, 400-409
- 小塩真司（2005）『研究事例で学ぶ SPSS と Amos による心理・調査データ解析』東京図書
- 金城 光（2006）「女子大学生の学業に関わるコミュニケーション能力と自己効力の関係についての実態調査」『社会情報学研究』15, 235-249
- 玄永牧子（2005）「大学生生活と進路選択に対する自己効力」『福島学院大学研究紀要』37, 69-75
- 玄永牧子（2006）「大学生生活と職業的進路への移行過程」『福島学院大学研究紀要』38, 63-72
- 下山晴彦（1986）「大学生の職業未決定の研究」『教育心理学研究』34,20-30
- 高橋桂子（2007a）「仕事満足度と与える大学の教育効果」『生活社会科学研究』14, 1-18
- 高橋桂子・藤村正司・松井賢二・北條雅一・加藤かおり（2007b）『新潟大学における教育効果の実証分析：

- 教育と仕事の関連を検証する』(平成18年度新潟大学人文社会・教育科学系プロジェクト経費 報告書)
- 鉄島清毅 (1993) 「大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討—」『教育心理学研究』41,200-208
- 長内優樹 (2004) 「現代の大学生のアパシー傾向に関する研究 - 関連する諸勝因の検討 - 」SPSS 研究奨励賞 2004年度 (第4回)
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995) 「特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—」『教育心理学研究』43, 306-314
- 速水敏彦・西田保・坂柳恒夫 (1994) 「自己成長力に関する研究」『名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)』41, 9-24
- 本田由紀 (2005) 「子どもというリスク—女性活用と少子化対策の両立を阻むもの」岩井紀子・佐藤博樹編『日本人の姿 JGSS にみる意識と行動』有斐閣
- 三宅幹子 (2000) 「特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に与える影響について—課題成績のフィードバックの操作を用いて—」『教育心理学研究』48,42-51
- 矢野眞和 (2001) 『教育社会の設計』東京大学出版会
- 矢野眞和 (2004) 「大学教育と卒業後のキャリア(若年就労研究の学際的検討)」『日本教育社会学会』56,322-323
- 矢野眞和 (2005) 『大学改革の海図』玉川大学出版部
- Bandura, A. (1977) Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological review* 4, 279-289
- Taylor, K. M. ,Betz, N. E. (1983) Application of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision, *Journal of Vocational Behavior*,22, 63-81

(平成20年2月29日受理)